

# 観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

## 特集◎ 広がれ日本のフットパス

### ◆巻頭言

日本フットパス・システムの夢おこし 村山 友宏……①

### ◆特集

● 英国に学ぶフットパスの歴史とその魅力 市村 操一……②

● 資源がない!? 資金がない!? 人材がない!?  
どんな地域でもできるフットパスによる<sup>まち</sup>観光づくり  
—多摩丘陵フットパスの場合 神谷 由紀子……⑦

● 地域を元気にする歩く道  
—フットパス 小川 巖……⑫

● 自然と文化のエコツーリズム  
—カントリー・フットパスの魅力 ケビン・ショート……⑰

### ◆視点

● 宗教行事と行政のかかわり方 朝倉 はるみ……⑳

### ◆連載

I あの町この町 第37回

オリベの心 —岐阜県多治見市 池内 紀……㉔

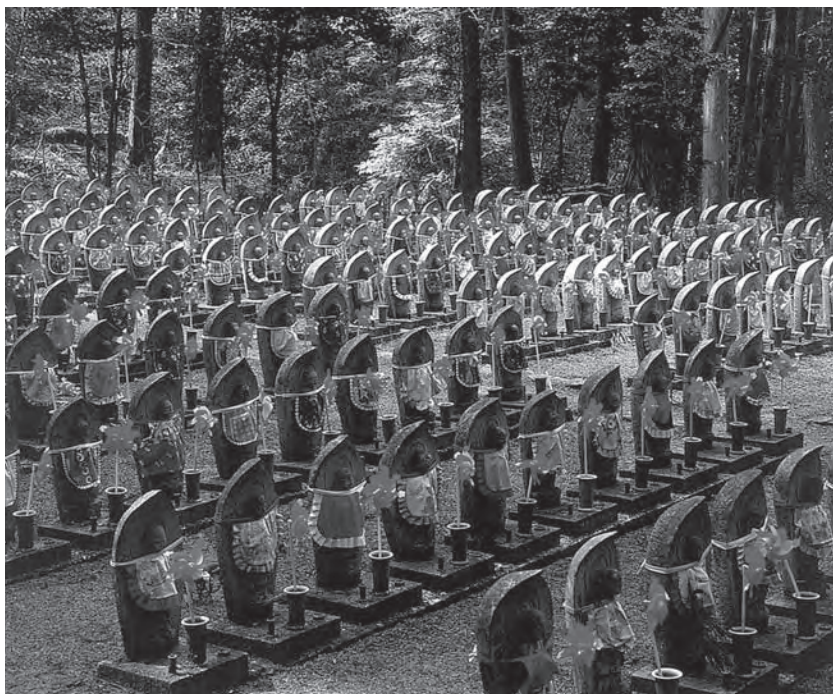
II 風土燦々⑩

前代未聞の三河版サミット(前編) — 愛知県新城市 飯田 辰彦……㉔

III ホスピタリティーの手触り 58

日本人と温泉 山口 由美……㉔

◆新着図書紹介……㉔



## 金剛輪寺・千体地蔵

琵琶湖の東に位置する金剛輪寺は鈴鹿山脈の西麓にある。大仏さまを建立した聖武天皇と行基菩薩により七四一年(天平十三年)に開山された。

本堂は鎌倉期を代表する和様建造物で、堂内には秘仏本尊聖観音、阿弥陀如来坐像、不動明王、毘沙門天立像、十一面観音、四天王像などが安置されていて、間近で拝観できる。本堂は国宝に、美しい姿を見せる三重塔と二天門は国の重要文化財に指定されている古刹である。また、近江路を代表する庭園は国の名勝となっていて旅人を魅了する。四季折々の光景は訪れる人々に安らぎを与える。写真の千体地蔵尊は三十年前から現在の信徒たちが回向を込めて建立したものだという。本堂へ向かう長い石畳の参道やその脇では約千七百体が参詣者を迎えてくれる。深紅の風車が供えられ杉の巨木とマッチして美しい。八月九日の千日会には明かりが入り幽玄の世界を醸す。レンズを通し静かな行まいを映像化していると、心が洗われる思いであった。

ついに日本にも、草の根市民活動の中からフットパスづくりの全国連携が始まりました。その歴史的意味は限りなく大きく、欧米の「歩きみち」を歴訪し、日本でもぜひ世界に発信したいニッポンのふるさと・地域の誇りをユニバーサル・フットパスで日本列島をつなぐ夢を追ってきた者としては感慨ひとしおです。

歩くことが人間の限りなく豊かな営みであることに気付かないのは便利漬けの現代人の通弊ですが、歩くことを楽しむ「歩きみち」が社会資本として重視されていない国は、先進国の中では日本だけのようです。

ウォーキングの実践が健康・環境・観光・教育・交流の5K分野に社会貢献することが知られ、またウォーキング志向人口が国民の五％に達した今（二〇〇九年九月内閣府世論調査）、ウォーカーブル日本、ウォーカーブル都市をどうつくるかは、まさに時代のテーマです。

フットパスづくりはハード先行の土木事業ではなくソフトな生活文化事業です。フットパスづくりの原則は、①官民連携でも歩く人が主体、②地域の誇りのネットワーク、③公共交通機関とのアクセスの配慮、④明解な道標とマップ、⑤体力に応じて選択可能なコース設定、ユニバーサルの配慮、⑥地元の十分な理解、⑦環境や住民の生活静穏を守る利用ルール、⑧道を守り育てる利用者責任の仕組み。アドプト制度・歩きみち守り・フットパス・レンジャー等、⑨地域調整役のフット

## 日本フットパス・システムの夢おこし

社団法人 日本ウォーキング協会会長／歩行文化研究所所長

村山 友宏

トパス・コーディネーター（道中奉行）の設置、⑩将来はコースを広域ネットワークし、先人の足跡やニッポンのふるさとをネットワークする日本フットパス・システムへのリンクを視野におく、等が望まれます。

欧州大陸にはE15の長距離フットパスがあるように、米国にも一九六八年ナショナル・トレイル・システム法ができ十七本のナショナル・トレイルができています（日本の東海自然歩道はこのうちトレッキングコースのア巴拉チアン・トレイルがモデル）。

十四、五年前に私どもは米英独の「歩きみち」を二年間現地調査し、その事例を『ウォーキング・トレイルのみちしるべ』として出版しました。建設省に提言した「ウォーキング・トレイル事業」は一九九六年から始まっています。

その後、私どもは二〇〇四年に国土交通省後援で「美しい日本の歩きたくなるみち」500選を公募し実地選定したところ利用者は年間九百万人を超えました。この勢いを得てさらに国際級の「日本フットパス・システム」の実現をめざし、各地のウォーカーやベテランのユースホステラーたちとともに実地調査を始めています。

「気持ちよく楽しく歩ける」地域づくりへの住民参加は地域活性化の引き金となり、日本の魅力を旅して歩く「日本フットパス・システム」づくりは観光立国の大きな礎いしずえとなるはず  
です。さあ、各地で「日本快歩列島」夢おこしの一歩を！

（むらやま ともひろ）

# 広がれ日本のフットパス

ここ数年、中高年を中心にウォーキングブームが続いています。昨今よく聞かれるようになった「フットパス」とは、森林や田園地帯、古い町並みを楽しみながら歩く小径のこと。今号では、発祥地である英国のフットパス発達の歴史、地域活性化・観光振興を目的としたフットパスの活用を目指す国内の活動などを紹介します。

## 英国に学ぶフットパスの歴史とその魅力

東京成徳大学大学院 心理学研究科長 教授

市村 操

ウォーキングブームは経済先進国に共通の現象のようである。英国では麦畑の中でも歩いて行ける歩行者の権利が保障され、そのための歩行路ができている。この道はフットパスと呼ばれ、十六万キロにも及ぶ。

ドイツでは全長四千九百キロもある長距離歩行路の一部を歩いたことがある。この道は、北はスウェーデンに始まり、デンマーク、ドイツ、スイスを経てイタリア半島の中部に達する。ヨーロッパ・ランブラーズ協会は現在このような長距離歩行路を十一ルート

公認している。ここに紹介したルートはその1号線でE1と呼ばれており、European Ramblers Associationのホームページでその概要を見ることができ（少し長い散歩を現在ではwalkingと呼んでいるが、伝統的に英語ではramblingで、米語ではhikingを使う）。

スイスのチロル地方では山に登る人だけでなく、山を眺めながら歩く観光客を世界から集めており、観光立国らしく立派な歩行路標識が整備されている。スイスのウ

ォーキングで使われるスキーマのストックのような二本杖が近年日本にも入ってきた。

このようなウォーキングの流行の歴史をさかのぼると、約二百年前の英国に行きつくだろう。

### ウォーキング文化の誕生

宗教的巡礼の歩行とは別に、一八世紀後半に英国で始まった自然の中を楽しんで歩く歩行の習慣の原因にはさまざまな説があるが、三つの大きな原因が考えられている。



欧州長距離バス

品で初めて使われた。当時は日本の重工業が発展し、東京の西の郊外には高給取りの会社員の住宅地が広がり始め、休日には高尾山や秩父の山々に出かける

一つは、産業革命に伴う道路の整備である。これによって英国人は長距離の徒歩旅行を楽しむものとして経験できるようになっていった。二つめは、自然科学の発達である。自然の観察、とりわけ植物観察を趣味とする人たちの日曜の午後の逍遙が一つの流行となった。三つめは、英国ロマン主義文学の隆盛である。レイク・テイストリクト（湖水地方）に住んだ詩人ワーズワースなどの自然の賛美と長距離ウォーキングの習慣は多くの人の心をとらえた。

一八二〇年代にはイングランド北部の都市、ヨークやマンチェスターに長距離の散歩を楽しむランブラーの団体が組織されはじめた。

このようなウォーキング愛好の精神は、明治の日本にも入ってくる。一九〇一年（明治三十四年）には国木田独歩は『武蔵野』を発表し、自然の中を無為に散策する楽しみを描いた。島崎藤村も一九二二年（明治四十五年）『千曲川のスケッチ』で同じように自然の中の逍遙を描いている。彼らとともに英国ロマン主義の影響を受けた作家であった。

昭和の初期にはハイキングブームが起こっている。雑誌『ハイキング』が一九三二年（昭和七年）に刊行され戦時中の一九四三年まで続いている。一九三五年（昭和十年）発表の川端康成の「雪国」の中でハイキングという言葉が日本の文学作品



スイスのフットパスの標識の下で地図を確認する歩行者

余暇活動が現れるようになった。鉄道会社は那須高原や軽井沢や尾瀬や日本アルプスへハイキング客を勧誘するようにもなった。英国の場合も日本の場合も、長距離歩行を余暇の楽しい習慣として発展させた背景には、人々の自然を求める気持ちとそれを実現させる社会的基盤があったと考えられる。英国の場合は道路の整備であり、日本の場合は鉄道網の発展であつたらう。

## ゴルフファーに優先する散歩者

英国は現在のウォーキング文化の発祥の地であると同時に、現代のウォーキング王国と見ることができよう。英国人の余暇スポーツの参加率では水泳やゴルフを圧倒的に引き離して一位である。また、国民のウォーキングの楽しみを支える社会的基盤は極めてよく整備されている。その一つに「フットパス」(Footpath)として知られる歩行路の整備がある。

筆者がこのフットパスの存在を知ったのは、スコットランドのゴルフ場でゴルフをしているときであった。ティーインググラウンドの前の砂利道を普段着の高校生ぐらいの女性が二人のんびりと歩いていた。キャディが「あの人たちの通り過ぎるのを待ってください。あの人たちに優先権があります。ここはフットパスですから」とわれわれプレーヤーを制止した。全英オープン舞台であるセントアンドルース・オールドコースのインコースの外側にも「Public Footpaths」の標識が立っている。散歩者が海辺へ出ていく道である。ゴルフファーは散歩者がいないことを確認しなければならない。この散



麦畑の中のフットパス

歩者優先の文化は新鮮に感じられた。

## 労働者の「歩く権利の要求」

現在の英国のフットパスは麦畑の中を通り、農家の果樹園を横切り、森林の管理道路を借用し、動物を刺激しないようにして牧場に入り込み、鉄道の廃線跡を利用して一般の道路の一部も路線に組み入れてしまふ。つまり私有地への侵入を含んでいて、一



廃線跡のフットパス

定の条件のもとで、私有地へのランプラーの侵入は法律で保障されている。このような歩行路にはいくつかの種類があり、馬も入れる道や自転車が通れる道もある。それらを総称して「公共権利通路」(public right of way)と呼ばれている。英国のフットパスは土木工事で作るというよりは法律で通行権を保障する方法でつくられる。これに関する法律はイングランドとスコットランド

では違って、イングランドのほうがランブラーの権利が強いようである。英国全土を網羅するフットパスの地図はこの本屋さんにも、駅の売店にも、観光案内所にもある。北イングランドのフットパスを歩いていたときに農家の柵に突き当たったことがあつ



牧場の中へ

た。そこには、次のような掲示板が打ちつけられていた。

「お願い。私どもの果樹園を通るパブリック・フットパスへようこそ。でも、どうか、私どものブライバシーを尊重してください。サイクリング、ピクニック、生徒の団体はお断りいたします」

スコットランドではこれとは対照的な状況を経験した。エディンバラの東部の海岸を東へ向かって歩いたことがある。地図には「Coastal Walk = 海岸歩行路」と記されていた。その道は車の往来する普通の道路で、海側に歩道がついていて、そこからは五百メートルほど先に海岸が見下ろせた。しかし、道路と海岸のあいだにはジャガイモ畑が延々と続いていた。ときおり農道が海岸へ向かって入っていくが、例外なく「進入禁止 (No trespass)」の表示が出ていた。農場への私道である。水田と違ってジャガイモ畑には畦道あぜみちがない。私は二時間近く海を眺めながら歩き続けた。これは十年ほど前の経験だが、その後スコッ

トランドの地主たちの態度も柔軟になったという話を聞いている。

このような、誰でもが自由に歩ける歩行路の整備のきっかけは、マンチェスターの労働者の国土を自由に歩く権利の獲得運動であった。

英国のウオーキングの伝統は、中産階級の紳士たちの傘を片手にした優雅な公園の散歩の延長線上にあるのではなく、健康的なレジャーの場を要求した労働者階級の権利闘争の流れの上にあるといえる。

一九三二年の春の晴れた日曜日の朝、マンチェスターの労働者四百名が町の東にある「キングダースカウト」と呼ばれる荒地の丘陵に強行侵入する事件が起こる。この荒地は地主が雷鳥の狩り場として一般市民の散策を禁止していた。その私有地に労働者たちが「散歩する権利」を主張して侵入したのであった。

その後、この問題は国会でも取り上げられるようになり、一九四九年には国立公園・アクセス法ができるときに、その中に「田園への立ち入りを認める法律」が含まれた。さらに、一九九〇年には「優先通行権法」ができてフットパスを地主の都合だけで閉

鎖することはできなくなつた。

マンチェスターの労働者が侵入した場所を通る長距離フットパス「ペナインウェイ」は、一九六五年に整備が完成された。このフットパスは現在ではヨーロッパ長距離歩行路2号線E2に組み入れられ、ドーバー海峡を越えてオーステンデでベルギーに上陸し、フランスのニースで地中海に達している(四千八百五十キロ)。

## フットパスの成立の一つの事例

### ——テムズパスのできるまで

フットパスをつくるのは土木工事であるよりは行政である割合が大きいようだが、その一例としてロンドンのテムズ川沿いのテムズパスの成立までの概略を示したい。

ロンドン市民に愛されているテムズパスは、市から西北西に百キロほど離れた田園地帯のコッツウォルズから、オックスフォードを通つて、ロンドン市内を通過する二百八十八キロの長距離歩行路である。

このフットパスは一九二〇年代に構想された。市民の生活レベルが上がリ労働時間も短縮され、健康的な余暇活動の場所の必要性が生まれた時代である。一九三〇年代

に入ると地方自治体はテムズの「船引き道」を遊歩道として再利用できないかと検討を始めた。しかし、テムズの本流からたくさんの運河が分岐しており、橋を架けるか、渡し船を使う必要があつた。その準備を始めたときに第二次大戦が始まり、戦後議会がこの計画に予算をつけたときには、家用車の普及で渡し船は姿を消していた。河川敷の土地を所有する地主たちの反対

運動もあつた。ようやく現在のテムズパスが開通したのは一九八九年であつた。この計画に携わつた組織には次のようなものが入っている。①各地方自治体、②カントリースайд・コミッション(環境省田園保全課みたいな役所)、③ナショナル・リバーズ・オーソリティー(国土交通省河川課か?)、④地主の組合、⑤英国ランプラーズ協会(いちむら そういち)



ペナインウェイ



テムズパス



資源がない!? 資金がない!? 人材がない!?

どんな地域でもできるフットパスによる観光づくり

——多摩丘陵フットパスの場合

NPO法人「みどりのゆび」

理事・事務局長

神谷 由紀子

「広がれ日本のフットパス」

今、日本全国で、環境保全にも、まちづくりにも、将来の子供たちに残す社会づくりにも非常に有効な活動が草の根的に広がっています。フットパス活動です。フットパスとは「快適な歩く道」のことで、発祥地英国では全国に網羅された散歩道をゆったり歩きながら過ごす国民的レクリエーションですが、日本では英国とは少々違って、観光や環境保全のみならずまちづくりに画期的な効果があるとして注目されています。特に過疎が進んでいる地方や、資源がないと思われる限界集落などの活性化に非常に有効であると期待されています。

現在、北海道や東北、関東、東海、関西など日本全国で、フットパスの「魔力」

に希望を見いだす地域が増えています。二〇〇六年六月には山形県長井市で全国フットパス・シンポジウムが、二〇〇八年八月には北海道黒松内町で国際フットパス・シンポジウムが開催され、そして二〇〇九年二月には全国のフットパス活動の支援・連携を目的とした「日本フットパス協会」が設立され、東京都町田市で式典が行われました。

私たちNPO法人「みどりのゆび」は二十年近く多摩丘陵の小野路おののじを中心に活動していますが、フットパス活動によって短期間に地元が大きく活性化するのを目の当たりにしてきました。

多摩丘陵フットパス

私たちのフィールドである町田市の小野路は、多摩丘陵の中でもとりわけよく里山

の景観と生活が残る地域です。新宿副都心から小田急線で三十分～四十分の鶴川駅下車し、幹線道路鎌倉街道を一步入ると、そこには幕末から変わらない多摩丘陵の景観がしつぽりと残っています。

めばしい名所や史跡などほとんどなく、田舎の風景だけが広がる里ですが、ここを一度訪れた方はその景観の虜もよおしになり、自分だけの心のふるさととして繰り返し訪れてくださるほど、すごい魅力を持った地域です。しかしここは最初からこれほどの輝きを見せていたわけではありません。小野路で十年ほど続けてきたフットパス活動が功を奏したのです。

私たちとフットパスとの出会いは、二十年ほど前、近くの森の保全運動に始まりました。結局この森は開発されなくなってしまうましたが、緑は既存の法制度や税制

など制度を変革せずには残らないしくみになって、痛感しました。多くの方のご理解を得ることが必要だとさまざまな試行錯誤を繰り返した結果、最も訴求力があり効果があったのは、里山を楽しく歩いて見ていただくことだったのです。歩いてみると急に現れる開発現場を目の当たりにして、緑の重要性は私たちが説明せずとも多くの人々の心に響き、大きな力となりました。私たちは心に残る風景をお気に入りの道でつなぎ、いくつかのコースを整備しました。散策マップを作ってフットパス・ウォークを開催しました。日頃は車で通り過ぎていくような近くの地域を歩いて見直す地域発見ウォークは、当時は大変新鮮で大人気となりました。

## 活性化したまち、小野路

フットパス・ウォークの中でもとりわけ人気なのは、百人を募集して小野路のフットパスを歩いた後、地元のご伝統食を味わっていただく「多摩丘陵フットパスまつり」です。幕末のよすがを残す小野路の歴史や谷戸の自然を楽しんでいただいた後、昼食には地元の温かいおもてなしを堪能していただ

きます。お食事は多摩地方の祝儀にも不祝儀にも必ず出される行事食、赤飯（祝儀の時には特産の金ゴマをそのままかけ、不祝儀の時には「施鬼飯」と書き、ゴマをすりつぶしてかける）とけんちん汁です。惣菜は地元産の切り干し大根に芋茎の煮物、最後に地粉のうどんがもてなされます。赤飯にかける塩一つとつても、炭焼き釜で塩塊を炭とともに一週間焼いた後、石臼でひいたサラサラの甘い塩で、すべて都市生活では手間がかかってできない心のこもったおもてなしです。

フットパスの効果は、歩く側だけでなく歩かれる側の地元で予想以上の大きな活性化をもたらす、これが私たちが経験したフットパスの最大の効果です。多くの方が小野路の里を訪れ、素晴らしいと褒めてくださるので、地元の方々が自分たちの地域の価値に気づかれ、誇りに感じていただけるようになったのです。さらに庭先の野菜や、金ゴマ、地粉、味噌、梅干など、台所の奥に眠っていた手作りの食材をお土産として出してみたら数千円から数万円という現金収入が入るようになったのです。一年で小野路の地元の方々の意識は目に見えて変わ

り始めました。地元への愛情が生まれ、ひいては地元を保全し発展させていこうという「まちづくり」の意識が芽生えていきました。「小野路宿まちづくり協議会」が結成され、小野路宿の宿場の復元や元名主屋敷「角屋」の拠点化など、環境を生かした計画が進められています。

いったん有名になると小野路には情報や資金そして人材すべてが集まってきました。



「日本フットパス協会」設立式典

町田市は国からの補助金を取り込んで小野路の環境整備を始め、テレビや新聞などマスコミから頻繁に取材が入るようになりました。次第に多くの人々がまちづくりに関心されていきました。活性化とは、地元の人々がやる気になることではないだろうか、お金は後からついてくる——私たちは小野路で活性化のメカニズムを目の当たりにしました。

フットパスによって始まった観光まちづくり

### —町田、勝沼、長井、黒松内

人口約四十万人、典型的な首都圏のベッドタウンであった町田市は、観光という観点からはほとんど目立ったものはありませんでした。しかしフットパスによって多くの方が小野路を訪れるようになると、町田市も変わりました。フットパスの資源は景観です。九〇%が多摩丘陵の上であり、とりわけ大きな森と里山の景観や生活が残る町田市は資源の宝庫です。従来には考えられなかった観光資源を得て現在二十五のフットパス・コースが完成し、市の内外から多くの方が訪れています。

山梨県甲州市勝沼は、昔から、日本で先

駆的に本場ワインをつくり始め、新宿に営業のしゃれたレストランを出店するなど、並外れた経営センスを持つ自治体です。この数年間ぶどうの価格が据え置きになっていて収入の先細りが案じられるということ、活性化戦略としてフットパスに目をつけられました。なかなか統合の図れなかった地元、市民、行政が、心をひとつにして協働によるまちづくりを始められたこのことで、フットパスには「理性ではなく感性に訴え、人を惹きつけてやまない不思議な『魔力』がある」と担当者はおっしゃっていました。明治時代にワインを輸送した大日おひ影かげトンネルや豪族の隠れ集落深沢の縁側カフェなどのコースは、NHKでも何度も取り上げられました。

山形県長井市も、農業にごみの地域循環を取り入れたレインボープランや、映画『スウィングガールズ』の撮影に山形鉄道フラワー長井線を提供するなど、進取の気象に富んだまちです。フットパスは国土交通

省がらみの「最上川フットパス」の構想に伴って整備されましたが、最上川のさまざまな表情をとらえた素晴らしいコースが数市にまたがって連なっており、英国のロングトレイルにも匹敵する大きな観光資源となっています。

北海道は「全道フットパスの集い」などもあるほどフットパスが観光やまちづくりの目玉となっている地域で、ニセコ、南幌、白老などなど、多くのまちがそれぞれ自慢のフットパスをお持ちで、根室にあるAB-MOBILITYという牧場のフットパスコースはわざわざ東京から若い女性が大勢来るほど



フットパスにはさまざまな効果が

の人気だそうです。黒松内町は人口約三千人のまちですが、北限のブナをシンボルにしたフットパスや、朝日新聞社の「にほんの里100選」で有名になりました。

このようにフットパスの神髄をよく理解したうえで、地元の勢いを取り込み、着実に成果を上げていくまちが全国に広がっています。

## フットパスの経済効果

ではフットパスに実質的な効果はあるのでしょうか。英国でのフットパスの効果は私たちの予想を超えるものです。二〇〇九年二月の「日本フットパス協会」設立式典後のシンポジウムで、ナショナル・トラストのジョー・バーゴン氏は「フットパスの力『Power of Walking』』という基調講演をしてくださいました。バーゴン氏は日本人にも人気のコッツウォルド・ウエイをつくった最高責任者です。

バーゴン氏によると、英国で最も人気のあるスポーツはウォーキングで、三千八百万人（英国の成人の七七%、二位の水泳の三倍）にも上り、ウォーキングの最大団体ランブライズ協会の会員数は二十年前の四万人か

ら現在十四万人に激増しています。

ロングトレイルといわれる長距離フットパスは、公式のものが十数本、非公式のものが六百本ありますが、利用頻度は約八億九千万回、英国の成人の一五%が利用していることになりました。

フットパスによって落とされるお金と雇用は年間八千億円、二十四万五千人（正社員）で、B&Bという朝食付き民宿での宿泊料、ビールやチーズなどの特産品販売など観光面のみならず、農地改良（三千七百七十億円）や環境保全、例えば湖水地方などでは千二百人の山岳侵食修復作業員など、新しい雇用も生み出しています。

B&Bの利用状況として青山学院大学の故平松紘<sup>ひらまつ</sup>先生のデータによると、ナショナル・トレイルの利用に使う一日の経費は、利用者数の約半数が二十ポンド（四千元）、四分の一が二十〜五十ポンド（四千〜一万円）、日帰り客が平均五ポンド（千円）だということです。通常フットパスは週末の二泊三日から一週間以上の散策が多いのですが、一〜二週間のツアーを行う人口も四万人あるとのことでした。

私たちは二〇一〇年の夏には実際に経済

効果が上がっている現場を見にバーゴン氏を訪ねたいと思いますが、英国はさておき私たちはどうかということになりますと、まだ販売所や宿泊施設、周遊券などの各インフラ整備が満足にできておらず、めぼしい成果は出ていません。しかし「みどりのゆび」の例を挙げますと、一冊五百〜八百円で販売している三種類のフットパスガイドマップの総売り上げが二〇〇九年は約一万五千部ありましたので、数字的には一千万円くらいにはなったことになりました。ある有名雑誌の記者さんに、一地域でマップがこれだけのベストセラーになるのはフットパスが大変有効であることの証明だとおっしゃっていただきました。

## どんなまちでもできる

### フットパスの公式

フットパスはどんな地域でもつくることができ、それによってまちづくりを成功させることができるかと私たちは考えています。いいフットパスができれば何の観光資源もなかった地域でも首都圏や都市部から多くの人を惹きつけることができます。特にこれまで全く資源がないと見捨てられてきた



3種類のフットパスガイドマップ

限界集落などは素晴らしい自然が残されており、フットパス的な見方をすれば最高の資源を持つていることになります。

また、すでに観光で成り立っている地域でも、フットパスはさらにリピーターの数を増やし、しかも今のアジア人中心の観光とは違った西欧人らの客層をターゲットとすることができそうです。フットパスから期待される楽しみやおもてなしは、観光による快楽や土産物とは異なるので、フットパスを備えることによってさらに多くの経済効

果が生まれます。

しかしいいフットパスをつくるのには、ノウハウがあります。フットパスは人を呼び込むための道具。しかもリピーターで来ていたかなければなりません。一番重要なのはいい景観をつないでコースとすることで、これが成否の鍵です。名所旧跡をつないだコースは一度参加すれば満足してしましますが、いい景観をつないだコースは春夏秋冬何度でも足を運びたくなるものです。名所旧跡は副ルートとして取り込めばいいのです。

このほかにもいろいろノウハウがあります。そのノウハウを広くどなたにもお伝えするために二〇〇九年二月に「日本フットパス協会」が設立されました。私たちの小野路の多摩丘陵フットパスにも、日本全国から自治体やNPOが視察に見えています。

### フットパスから見えてくる

#### 日本の将来

英国でフットパスが現れたのは産業革命後の一九世紀末でした。重労働と過酷な環境にあえぐ労働者は健康と精神の回復を求めて緑の中を歩きたいと、森川山海を囲い込んでいた地主に対してフットパス「歩く

権利」を法律として獲得しました。

現在の日本の状況は、ある意味で、この百年前の英国に似ています。バブル経済がはじけた後、多くの失業者を出すこととなった経済状況の悪化、農業や農地の荒廃による食糧自給率の低下、一方で中国の餃子に象徴される食糧安全への危機感、勝ち組負け組に二分化する社会、それに拍車をかけた米国サブプライムローンの打撃による若者の就職難。日本には未曾有の閉塞感が漂っています。

今や低成長でも人間の生きる速度に合った、地に足のついた経済社会の再建が望まれています。どこから手をつけたらいいかわからない今の日本で、フットパスを試みていただけると地方を魅力ある地域にすることができそうです。いいフットパスは都市住民や若者を惹きつけ、リピーターをつくり、その地域への愛情を育て、農業や商業を興し、豊かなまちをつくりまします。フットパスが全国に浸透すれば、各地の過疎に悩む自治体が活性化し、日本全体の底力が上がってくるかと期待しています。美しく明るい日本を子供たちに残すことを願っています。

(かみや ゆきこ)

# 地域を元気にする歩く道——フットパス

酪農学園大学環境システム学部教授

小川 巖

## はじめに

ウォークツーリズム (Walk Tourism) という用語が定着しているとは思えない。だが歩く旅はわが国でもしつかり根付いている。四国のお遍路や熊野古道歩きはその最たるものと言えるだろう。中山道、奥の細道を何日もかけて歩く人も増えている。見方を変えると登山も「歩く旅」のひとつと言えなくもない。これらはいずれも目的地を目指して歩く活動という点で共通しているのではないか。

一方、特別の目的は持たずに、ありふれた普通の道を歩く活動が、日本でも盛り上がりを見せてきた。そういった歩く道がフットパス (Footpath) である。すぐれた景観エリアや歴史的な建造物がルート沿いになくても構わないが、多様な環境を含んでい

たほうが面白いし、楽しみも増す。

例えばこんなコースを思い浮かべるとよいだろう。鉄道の駅からスタートして、しばらくは古くからある活気あふれる商店街の狭い道を行く。一キロほどで住宅街に入る。閑静な住宅街だけに庭の草花を眺める楽しみもある。さらに一キロほどで住宅が途切れ、畑と水田に変わる。広々とした空間をヒバリのさえずりを耳にしながら行くと川にぶつかる。堤防に沿って上流に向かうと広大な森林公園である。園内には遊歩道が縦横に通っているので、標識に従って一番奥まで進む。標高が高くなるだけに展望が一気に開けて気持ちがいい。ここで昼食だ。帰りは林道を下って再び農耕地を経て、二つ先の駅に到着。とまあ、こんな具合である。昔からあるハイキングコースに近いかもしれない。

つまりフットパスとは特に景色とか由緒ある建物などを目的とするのではなく、歩くことそのものを楽しむとでもいったらよいだろうか。ありふれた小径こみちや農道をつなげばフットパスになるのである。いろいろな種類の道をつなぐとともに地域と地域をつなぐことにもなる。コースの新設は一番最後に考えればよいだろう。

北海道ではこの五、六年の間に全道各地でフットパスをつくったり、歩いたりする活動が盛り上がってきた。過度に車に依存してきたリアクションともとれるし、スローな生き方の具体化という見方もできる。自身の健康の維持、向上を目的とするウォーキングとは異なり、人と土地との触れ合いを促すフットパス歩きは、案外奥が深く、ひとつとして同じコースがない。そんなフットパスの魅力と可能性についてレポートしたい。

ただし、私の住む北海道の話題が中心にならざるを得ない点はお許し願いたい。

## 多様な歩く道——フットパス

フットパスといっても新たにつくったりするケースはむしろ稀で、既存の道をつなぐ形で一本のルートにしている場合が大半

### ①旧道、山道を復元したルート

えりも町（猿留山道）、様似町（様似山道）、石狩市（濃昼山道）

### ②旧国鉄等の廃線跡

新得町（旧狩勝線）、別海町（旧標津線）、稚内市（旧天北線）他

### ③けもの道

平取町（仁世宇園周辺）

### ④都市近郊のフットパス

恵庭市（カントリーサイド）、旭川市（再会の森コース）

### ⑤農村地帯のフットパス

黒松内町（チョポシナイ、西沢他）、白老町（ウヨロ川フットパス）、南幌町（幌向運河他）、滝川市（江部乙菜の花コース）、根室市（AB-MOBIT）、上富良野町（和田農園パス他）、ニセコ町（旧有島農場コース他）

道内の主なタイプ別フットパス



英国の放牧地を通るフットパス

である。自動車道路は通常、国道と県道または市町村道が途切れることなく結合している。だから車に乗っていてもどこまでが国道で、どこから市道になったか分からないのがむしろ普通である。ところが園路とか堤防上の管理道となると、管理者が設置目的に沿って建設するものだから細切れに

ならざるを得ない。国、自治体の別だけでなく、同じ役所の中でもセクションごとに道や管理道をつくっているのが、ひとつの地域にそんな脈絡のない道が散在している。

意識したかどうかは別として、フットパスはそういった雑多な道をつなぎ合わせることで、新たな魅力ある道に仕立てる作業、といってもよいだろう。だから例えば十キロのルートには農道、林道、二級河川の堤防道、森林公園の遊歩道、近隣公園の園路、牧場内の作業道などが含まれていたりする。場所によっては国道などに付帯した歩道を歩くこともあるし、住宅地の市道の場合もある。人が歩けるのであれば、シカが踏み固めたけもの道でもよい。所有者の了解が得られれば、水田の畦道あぜみちをルートの一部に取り込んでよいわけだ。むしろこのようなイレギュラーな道のほうが面白く、歩いて楽しいのである。

北海道内でフットパスづくりが始まったのは、二〇〇〇年前後からだから、まだ十年ぐらいの歴史しかない。本格化したのは二〇〇五年あたりからである。今では三十を越す地域（自治体）で百本前後のルート

がつくられていると見られる。それらをタイプ別にまとめたのが13頁の表である。

広大な農業地帯（カントリーサイド）を通るフットパスは単調と思われがちだが、水田、畑、果樹園、花畑、放牧地などが混在してモノトーンではないのも魅力である。最近では札幌圏とか旭川市のような都市部にフットパスがつくられつつある。札幌のような大都市でもフットパスをつくって歩きたいという動きが出てきた。

このトレンドはますます勢いづくと思われている。あと数年もすると、北海道を歩いて回ろうとする人たちが増えるのではないかと。現在、道内を歩く旅行などまったくといってよいほど顧みられていなかっただけに今後が楽しみである。その場合、ただ歩いて汗を流して終わりというのではなく、地元の住民、産物との触れ合いが増すという期待が膨らむ。そんな取り組みが続けている二つの自治体の事例を紹介してみたい。

## ブナ林と施設をつなぐ フットパス——黒松内

黒松内町は札幌と函館のちょうど中間に

位置する酪農を主産業とする静かな町である。ブナ北限地帯にあたる歌才うたさいのブナ林は、国指定の天然記念物なのでご存じの方もいるのではないだろうか。最近、朝日新聞社による「にほんの里100選」に選定されている。

また一九九〇年前後のリゾート熱に浮かれることもなく、その後二十年間地道な事業を積み上げてきた。自然体験研修宿泊施設として「歌才自然の家」、ブナをテーマにした体験交流施設「ブナセンター」、地元の原料を加工してハム、ソーセージ、チーズなどを製造する「トワ・ヴェール」、滞在型宿泊施設「ミニビジターセンター」をはじめオートキャンプ場、道の駅、温泉を順次建設してきた。

とはいうものの、車で訪れる人の多くは、一〜二時間であわただしくニセコ、洞爺湖、



コースサインが完備している西沢コース（黒松内町）

函館方面に移動してしまう。ゆっくり地元にとどまってブナ林をはじめ各種の施設を利用してもらうにはどうしたらよいか考える中でフットパスに行きついた。そうと決まると打つ手が早いのがこの町の身上であ





ウォーカーに人気の水田の畦道（南幌町）

る。町役場の呼びかけで町民主体の「フットパス・ボランティア」が結成された。集まった約二十人のボランティアと数人の役場職員、それに札幌方面から集まった十数人の人たちが、廃道となつて久しい町道の草刈

り、笹刈りに挑んだ。プロに作業を頼めば二、三日の工程で刈り終える仕事をわざわざ手作業で臨んだのだからユニークだ。毎回三十人前後が作業に携わりながら春、夏、秋の各一日計三日をかけて開通にこぎつけた。時間をかけただけにこのフットパスに対する愛着はひとしおである。刈り取り区間の前後の農道、林道、町道を含め約十キロのルートが全通したのは二〇〇四年十月で、地区名に由来する「チョボシナイ・コース」と命名された。現在では「道の駅くろまつない」またはJR函館本線熱郭駅を起点に町役場に至るルートの所要所にルートサインが貼りつけられているので、初めての人でも迷わずに歩くことができる。以後ルートを増やしていき、現在四ルート（約三十キロ）が完成している。

カントリースайдを歩き

ながら各種施設やブナ林を巡るのは、車で回るとは全く異なる印象を与えずにはおかない。その上、一泊、二泊する人が増えるのだから、フットパスの効用は想像以上のものがある。それぞれの施設が提供する地元産の乳製品は手作りが主体だし、採れたての野菜のおいしさも捨てがたい。このような「食」と「味」の印象も後々まで残るのではないだろうか。

### 歴史遺産と農をつなぐ

#### フットパス——南幌町

南幌町といってもその位置を知る人は少ない。札幌から車で約五十分、石狩平野の一角を占める農業地帯であるとともに札幌のベッドタウンとして発展してきた。明治時代に開拓が始まったころは、一帯が泥炭地（湿地）であった。明治二十九年（一八九六年）に開削された運河が唯一の交通手段という時代が長く続いたという。札幌の中心を南北に流れる創成川と同時に完成した北海道最古の運河である。本来の役割を終えたとはいうものの現在も運河の姿をとどめている。この運河を活用した地域おこしはできないものかと考えた地元住民が

ループが、二〇〇六年に運河沿いの道と市街地に保存されている駅通えきどおを結んでフットパスにすることを思いついた。南幌温泉をスタートして運河沿いを歩き、駅通を見てから昼食後は防風林の中を抜け、田園の畦道を歩かせてもらって温泉に至る約十二キロのルートが出来上がった。

この町は大消費地に隣接しているせいもあって、有機栽培や無農薬農業を実践している農家が点在している。二年目からはそういった農家に立ち寄れるルートをつくるようになった。休憩だけでなく、倉庫で昼食をとらせてもらうなどするうちに作物を試食するようになった。すると新鮮でおいしいものだから土産代わりに買い求める人が次々と現れた。そのみか後から電話などで注文する人も出てきた。安くて新鮮、そして安心安全なのだから、こんな確かなものはない。フットパス歩きが農家の人たちとの触れ合いに発展したことになる。

地元のグループは、フットパスを歩いてもらうだけでなく、途中で農作物の栽培や手入れをしてはどうかとアイデアをふくらませている。このようなフットパス農園が実現すれば、リピーターが自然と増えるだ

けでなく農作物の販路拡大にもなり、まさに二石二鳥である。

## フットパスは地域を変える

もともとある道を有機的につなぐだけで、ストーリーが生まれるという例として、北海道の二つの町を紹介した。他にも個性的でユニークなフットパスは数多い。

最後にフットパスの効用について改めて考えてみたい。まず言えるのは、金をそれほどかけずに住民主体で行える活動だということである。国、地方ともに財政が厳しい折、これはすぐれた利点である。第二には、ゆつくり歩くのだから当然所要時間が長くなる。つまり滞在時間の大幅な延長が期待できるという点を挙げたい。今、観光分野では滞在時間をいかに延ばすかに知恵を絞っているが、期待通りに進んでいないのが実態であろう。そこへいくと十〜十五キロのフットパスルートがあれば、丸一日その地域に滞在することになるし、一泊してもらせる可能性も高まる。第三としては、その結果として地元産の産物に触れる機会が増えるため販路拡大のチャンスが生まれる。沿道にレストランを設けて車利用の人も取

り込んで繁盛しているルートもある。常設店舗とはいかなくても、ルート途中で採れたの野菜、山菜の販売コーナーを設けるところはいくつもある。

歩くという最もシンプルなアクティビティにだけに赤ちゃんと足の悪い人以外は、誰でも参加できる裾野の広がりを持っている点をもっと意識されてよいだろう。歩く人にとっても健康に良いという直接的な効用のみならず、地域の活性化にもつながる点が重要である。

さらにひとつの町村の枠を超え、周辺地域を結ぶ広域フットパスさえ構想されるようになった。富良野、ニセコ、根室をはじめとした地域でその動きが始まっている。今の勢いでいけば、あと数年で北海道の大半の市町村にフットパスがつくられ、全道をネットワークするフットパスも夢ではない。広域フットパスは、まさにその先駆けといつてよいだろう。

道内にフットパス網が張り巡らされた時、二日、三日で忙しく観光するのではなく一週間、十日間かけてゆつくり歩く旅が定着するのではないかと期待している。

(おがわ いわお)

# 自然と文化のエコツアーリズム ——カントリー・フットパスの魅力

東京情報大学環境情報学科教授

ケビン・シヨート

ぼくが最初に日本に来てから、もう四十年近くの長い年月がたっています。当時のぼくはアメリカ陸軍の普通兵で、二十歳過ぎたばかりの生意気な青年でした。もちろん、最初からのライフプランは、残りの兵役を早く終わらせて、一日でも早くアメリカ東部のアパラチア山地の田舎に里帰りし、従弟と親友とのJOBAS(ライフスタイルズ・オブ・ビール・アンド・スポーツ)生活に戻ること。ところが、四十年たつて今、ぼくはまだ日本にいる。「ケ빈は日本のどこあたりを見てきましたか?」とよく尋ねられますが、「自慢話になるが、ぼくはすべての県に少なくとも数回は行ってる」と、相手があまり悔しがらないよう慎重に答えます。そして、「えっ、日本にはそれほどの面白い所があるの?」の決まり文句に対しての返事はもちろん、

「あるよ。ある」

日本には面白い所がたくさんあります。これはただの外国人のおせじではありません。ぼくが三十年をかけて日本各地を歩き回りながら自分の足と目で確認してきたこと。自信をもつていえること。だって、三十年かけても、次から次へと面白いテーマが現れてくる。逆に、面白い所があまりに多くて、なかなか狙いが定まらない。

面白い所がこんなにあるというのは、それなりのdiversity(多様性)があるから。多様性はいろいろなレベルで考えられる。例えば、生物多様性条約(Convention on biological diversity = biodiversity)。生物の多様性を「生態系」「種」「遺伝子」の三つのレベルでとらえている。また、言語、神話、食文化などいろいろな文化多様性(cultural diversity)もある。多様性はどんなレベル

で考えても、高ければ高いほうが環境の変化への適応性が高いとされている。

日本は各タイプの多様性に恵まれている。南北に長くつらぬく日本列島は、亜熱帯から亜寒帯までの気候、実にいろいろな自然環境が見られる。特に、森の成長に必要な条件がそろって、北の針葉樹林から南の照葉樹林まで、いろいろなタイプ(生態系のレベルの多様性)の森林が各地の山の斜面を覆って、そこに多様な生き物(種のレベルの生物多様性)が生息している。日本は固有種が多いだけではなく、例えばアジア大陸と同じ種であっても違った亜種や地域個体群となっている(遺伝子のレベルの生物多様性)。世界の視野で見ても日本は生物多様性の保全になくてはならない。日本は有名な国際自然保護団体のConservation Internationalが選んだ世界のbiodiversity

hotspot)にも名を連ね、世界遺産白神山地や知床半島などのエコツアー目的地もある。

文化多様性においても日本はとても恵まれている。例えば、日本の木造建築や中世のお城などは世界でも指折りの文化遺産に間違いありません。また、日本は先史や古代文化も豊か、古代史や考古学などの研究が世界トップレベルに進んでいる。歴史や考古学のファンも多く、遺跡の保全や資料館整備などの歴史文化ツーリズムのインフラも発達しています。卑弥呼や『源氏物語』などの古代ロマンもたっぷり！日本はまさに自然も文化も楽しく学べるごとがとても多い。

ぼくはナチュラリストとしてのイメージが強いが、実は植物や昆虫など自然系の知識はすべて独学で学んだもの、本来の専門は民俗学や歴史などの文化系。ぼくは自然系と文化系の両方が大好きで、なによりも楽しいのは、その自然と文化が重なり合ったり、お互いに影響をし合ったりするところ。そして、このような自然と文化のコラボレーションこそ、日本の最大の魅力だと思う。

日本の伝統的な暮らしは、土地や資源を上手に使う知識と知恵にあふれている。例

えば、豊かな森林環境に包まれて発展してきた日本の文化には、いろいろな森林に生えるさまざまな木の性質を知り尽くしてその特徴を見事に生かす「木の文化」がある。また、日本は五千〜六千年前の縄文時代から森林管理の長い実績も誇る。建築材、燃料、食料、薬草など、生活に必要な物質を森林からいただきながらその資源と生態を保全する持続可能な森林管理 (sustainable woodland management) が日本の各地で見られる。水を貯めたり流したりして、水系そのものを上手に利用管理する知識や知恵 (sustainable watershed management = 水の文化) も豊富、また、魚などいろいろな海洋資源を持続可能的に利用する資源管理 (sustainable resource management) のノウハウも日本の各地の沿岸にある。

このような伝統的な持続可能な暮らし (traditional sustainable lifestyles) などの文化と、その基盤となっている自然や景観をワンセットとしてとらえてこそ、日本の本場の魅力を引き出すことができると思う。例えば、和紙の製法や文化、歴史などと、その原料となるコウゾの木やいろいろな染料に用いられる植物を供給する森林や景

観をワンセットとして楽しめるエコツアーを企画すれば最高に面白い。そして、このように景観の中の文化を見つめるエコツアーを実現するため、ウォーキングコース (フットパス) を設置して、充実したインタープリテーション (解説) をいろいろな形式で提供することが一番有力だと思う。ぼくの個人的な体験にすぎないが、あるランドスケープ (景観) を自分の足で歩き通すと、やっとそのランドスケープの区間構造と仕組み (自然と文化の相対関係) が少しずつ見えてくる。

## カントリー・フットパス

日本の自然と文化のワンセットが最も身近に楽しめるのは、やはり里山 (ここでは里山を広い意味で使っている) の景観 (countryside landscape)。日本のカントリーサイドはスケールが小さく、いろいろな違ったタイプの森林や水辺の環境がモザイク状に混在している。例えば、ぼくのメインフィールドでもある千葉県北部、北総地域の里山には、竹林 (bamboo groves)、コナラ・クヌギの萌芽林 (oak coppices)、松林 (pine woodlands)、植林 (conifer

plantations)、『屋敷林 (farmstead groves)』、『萱場 (thatch grasslands)』などの森林や草地の環境と、『田んぼ (rice paddies)』、『水路 (irrigation canals)』、『ため池 (irrigation ponds)』などの水辺環境が交わっている。また、北総台地の上には、『クリ畑 (chestnut orchards)』、『ナシ畑 (nashi orchards)』、『または一年を通して実にさまざまな野菜を作っている野菜畑 (vegetable fields)』が広がっている。

この北総のカントリーサイドを文化と自然のワンセットとして楽しむには、やはり、カントリー・ハイクが理想的。スケールの小さい、モザイク状の里山は非常に親しみやすく、フレンドリーな感じで、圧迫感はない。

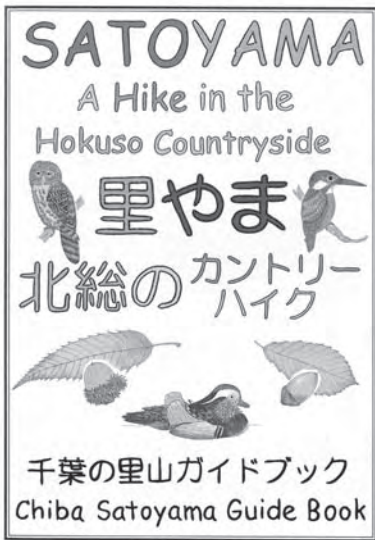
一切ない。

しかし質の高い里山エコツアーの第一必要条件として、地元の住民の理解と積極的な参加がある。ごみ散らしなどの環境問題を防いだり、住民のプライバシーや生活権を迷惑駐車などから守ったりするため、正式にフットパスのコースを設置したほうがよいと思う。設置されたコースは管理しやすい。また、フットパスの設置により、ガイドブックを作成したり案内板を掛けたりして、自然と文化を紹介するインタープリテーションも効率よくできるようになる。このインタープリテーションが、質の高い楽しいエコツアーのカギを握っていると思う。よいインタープリテーションは充実した内容と分か

りやすさ、楽しさのバランスを保っている。現在、北総地域でもカントリー・フットパス計画を進めている。ガイドブックや案内板も用意して、インタープリター（解説ガイド）の養成学校も設けた。最初のカントリー・フットパスは結縁寺を中心とした全長十一キロの半日コース。アクセスは北総鉄道、インタープリテーションの方向として、伝統的な生活と自然の関係をいろいろな観点から見つめている。

## 水と森

結縁寺フットパスは、スギ・ヒノキの植林、コナラ・クスギの雑木林、竹林、屋敷林、スタジイ・カシ類の社寺林など、いろいろな里山的な森林環境を訪ねる。また、ため池、田んぼ、水路など、里山の代表的な水辺環境も見られる。インタープリテーションはこの特徴を生かして、日本の里山の特徴でもある水と森 (water and wood) の名コンビを強調する。この名コンビこそ、日本の里山の高い生物多様性の秘密。水辺と森林の両方の環境を利用する生き物がとても多い。例えば、サギの仲間は水辺



ガイドブック



カントリー・ハイク

で餌をとるが、繁殖コロニー（サギ山）は森でつくる。千葉県のレッドデータブックにAランクとして指定されているニホンアカガエルも、田んぼで繁殖するが、餌は森の床でとる。

## 持続可能な暮らしと生物多様性

結縁寺フットパスは千葉県の言葉で「谷津」と呼ばれる細い谷間の縁を走る細い農道を通ることがある。このような道は急斜面と田んぼの間に挟まれ、幅は軽トラ一台程度。斜面に雑木林が生えしげっているが、ほとんどは放置されている。しかし、北総の花の丘公園や草深の森、松崎台公園などに、公園として下草刈りが行われている雑木林が数カ所あり、伝統的な萌芽管理の要素はよく分かる。コナラやクヌギの木を冬に伐採するが、毎春その切り株から新しい芽（これを萌芽やひこばえという）が出て成長する。それからの成長も速く、十〜十五年ぐらいで元の大きさに戻る。何回刈ってもまた萌芽で再生するから、同じ木を持続的に使える。萌芽林はまさに持続可能な資源利用の教科書通りのお手本。身近にある、解説しやすい、最高のエコツアー資源なのだ。

また、林床に積もる落ち葉はかき集めて堆肥の材料とされ、循環型の暮らしを可能にした。もちろん、ユリヤラン、スマレ、リンドウ、トリカブトなど、多くの野草が草刈りの行き届いている雑木林の床に生えるから、伝統的な生活と生物多様性の関係もとても分かりやすい。

## 民族植物学

民族植物学は、食文化と木の文化はもちろん、薬草文化やいろいろな野菜や作物の起源、歴史、品種なども含み、または芸術や文学、シンボリズム、スピリチュアルなど、実に広い視野から植物と人の関係をとらえようとする。学問としてのイメージがちよつと堅いが、実は誰だって独学の気分で楽しく学べるハイブリッド分野。例えば、北総台地は野生種のオンパレード！ サトイモ、サツマイモ、ゴボウ、カボチャ、ダイコンなどなど、各野菜の後ろに愉快なストーリーが隠れている。もともとはどこが原産地か、いつごろから栽培されているか、いつごろ、どうやって日本に持ち込まれたか。北総の畑では主に煮ダイコン用のダイコンとたくあん用のダイコンをつくっているが、冬、た

くあん用のダイコンを竹の棒に干している景観が超クール！ サツマイモの花や自然薯の栽培も格好いい！

食文化などの民族植物学を楽しく体験させるため、植物そのものが生えている景観や環境から入って、それから植物学、生態学、利用管理などを一つのつながりとして紹介すればよいと思う。例えば、春のカントリー・フットパスで企画するハイキング・エコツアーで竹と竹林にスポットを置くことができる。まずは地元の人たちに案内してもらって竹林の中に入る。そこで竹の植物的特徴や竹林の生態からインタプリーテーション



結縁寺

を始めて、日本人と竹の関係や竹林の維持管理問題まで学ぶ。その後、地元の人たちに教わって「たけのこ掘り」を体験して、最後は地元の主婦たちがつくってくれた「たけのこ尽くし」の郷土料理を味わう。これこそカントリー・フットパスならではのエコツアー！

## スピリチュアル文化

里山などの伝統的なカントリーサイド・ランドスケープには、精神世界で描かれているスピリチュアル要素 (spiritual element)



馬頭観音

もとても豊富。結縁寺のカントリー・フットパスは特に精神文化に恵まれ、産土神うぶすまがみ信仰、子安信仰、庚申こうしん信仰、水神信仰、六地藏信仰、大師信仰など、南関東の代表的な民間信仰がそろっている。これらのほとんどは石像などの「形」としても存在するから、インタープリテーションは非常にやりやすい。「頼政と名馬」の地域伝説も結縁寺周辺を舞台にする。このような現地と強いつながりを持つ伝記や伝説も素晴らしいエコツアー資源だと思う。

スピリチュアル文化と生物多様性保全の関係もカントリー・フットパスのインタープリテーションのよい材料になると思う。スピリチュアル文化と生物系の関係を調べる学門分野 (spiritual ecology) もあるが、里山ならその具体的な関係を容易に体験できる。例えば、結縁寺周辺にある熊野神社の周りに生える鎮守の森 (sacred grove) には、スタジイやアカガシの大木が生えて、原生林に近い森が見られる。このような大木にはフクロウが巣穴を見つけると説明すれば、精神文化と生物多様性の関係が分かりやすくなる。また、結縁寺周辺には、弁財天が小さな島で祀られている水神信仰ため池

(sacred irrigation pond) もあり、その周囲にはいろいろなトンボやアズマヒキガエル、ゴイサギ、カワセミなどの豊かな生き物が観察できる。同じようなため池は日本各地にあるが、水を上手に使う伝統知識と精神文化と豊かな水辺生態系の相対関係が説明しやすい。日本の社寺林や水神信仰ため池は世界的に見ても最高級のエコツアー資源だと思っている。

里山のスピリチュアル文化はフォークロアやエコロジーとしてとらえて楽しむこともできるが、現在にも大きな意義を持つメッセージも隠されていると思う。人間と自然の好ましい関係には、生態系などの物質的な関係と、スピリチュアルの関係の両方がなくてはならないと考える人もいる (ぼくもそう)。里山などの伝統的な精神文化は、われわれ人間は自然の恵みを受けながら生きていくという真実を認めて、その恵みに対して感謝の気持ちを込めて、またはその恵みを分けてもらうことのお返しに、自然や資源を荒らさないで大事に使うという、宗教や時代を簡単に超える素朴なメッセージを訴えてくれている。

(ケビン・シヨート)

# 宗教行事と行政のかかわり方

財団法人日本交通公社

主任研究員

朝倉 はるみ

## 定期的に行われる宗教行事

神社・仏閣や、高野山のように宗教に関係の深い土地には、かつては参拝者が、現在では観光客が数多く来訪しています。また、神社等で行われる行事も観光客を引きつける魅力を持っています。宗教行事、特に数年に一度行われる「式年行事」は、社寺と違い、「いつも見られるわけではない」という「時期限定」の魅力、そして宗教および地域固有の文化・伝統の「集大成」の魅力があるからでしょう。

今回は、平成二十二年に行われる長野県諏訪大社の御柱祭と、二十五年に予定されている三重県伊勢神宮の式年遷宮を例に、宗教行事と行政のかかわり方について整理しました。

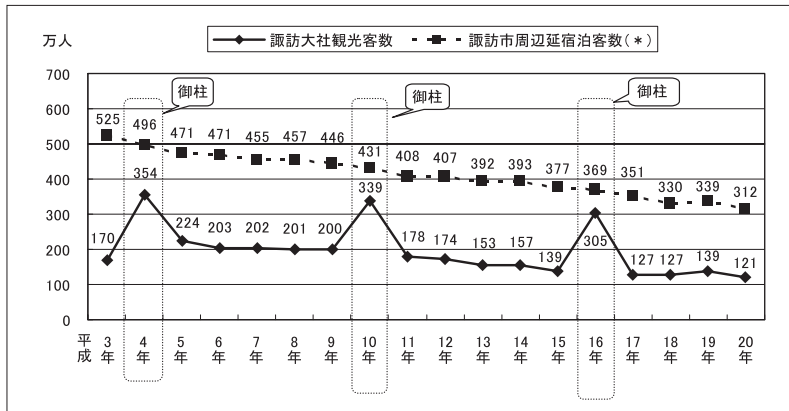
## 諏訪大社の御柱祭

御柱祭は、長野県の諏訪大社最大の神事で、正式には「諏訪大社式年造営御柱大祭」といい、

寅と申の年に行われる、つまり七年ごとの式年祭です。諏訪大社の社殿の造営と、御柱と呼ばれる巨木を山中から切り出し、地元各地区の氏子が分担して四つの御宮（注1）まで曳行し、社殿の四方に建てて御神木とする神事です。傾斜三十度の木落し坂から御柱を落とす「木落し」や、「里曳き」という御柱の曳行や花笠踊り、騎馬行列はマスコミにも取り上げられるほど華やかで有名です。長野県指定無形民俗文化財でもあり、平成二十二年の四月一日〜六月十五日に執行されます。

過去三回（四年、十年、十六年）の御柱が行われた年の諏訪大社の観光客数は、四年は三百五十四万人（前年の二・一倍）、七年は三百三十九万人（同一・七倍）、十六年は三百五万人（同二・二倍）と、いずれも前年を大きく上回っています（図1）。十六年は、下社の木落し坂近くに初めて有料観覧席（三日間のチケット販売数八千四百席）が設置され、御柱

図1 諏訪大社の観光客数（諏訪市・下諏訪町計）および諏訪市周辺の宿泊客数



資料:「観光地利用者統計調査結果」長野県  
\*岡谷市、諏訪市、茅野市、下諏訪町、富士見町、原村



祭の期間中に約百八十万人の人出があったそうです。

二十二年の御柱に向けては、諏訪地方観光連盟が二十一年四月に御柱祭情報センターを下諏訪町役場内に設置し、御柱祭の情報を一カ所に集約・発信していくこととし、同年六月には御柱祭に関するウェブサイトもリニューアルしました。二十一年には、都内や横浜でプロモーションイベントを開催するなどして、事前PRを行いました。また、上社御柱誘致客促進協議会が上社の木落し見学用に初めて千席の有料観覧席を二日間設置し、旅行会社を通して販売します（注2）。



平成16年御柱祭上社・本宮の里曳ぎ「建御柱」  
（写真提供：諏訪地方観光連盟）

さらに、下諏訪町は「下諏訪町御柱実行委員会」を立ち上げて行政が積極的に御柱にかかわっています。二十二年の御柱の総予算は約五千五百六十万円、前回に引き続き下社の木落し坂近くに有料観覧席（三日間設置予定。席数未定）を設置するほか、トイレ、ゴミ箱、案内所、駐車場の設置や、交通規制の周知、交通案内標識の設置、交通指導員の配置等を行う予定です。なお、観覧席と駐車場からの収入は、予算に充当されます。

### 伊勢神宮の式年遷宮

伊勢神宮の式年遷宮は、千三百年の歴史を有

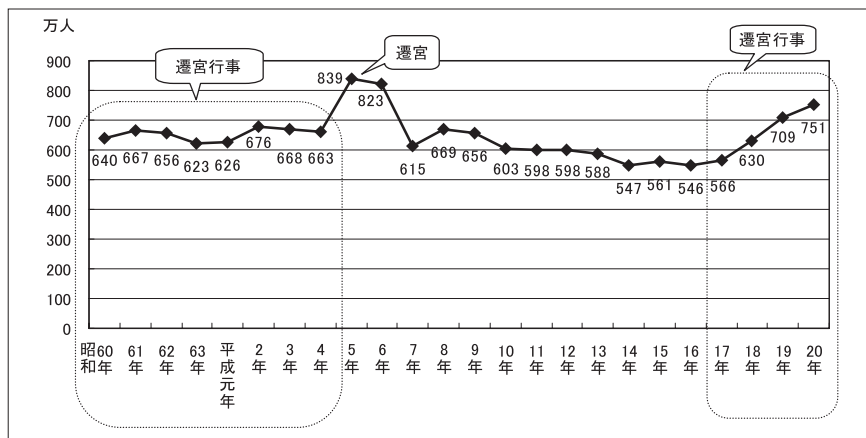
し、二十年に一度社殿を建て替え、御装束や御神宝を新調して神様にお遷り願う宗教行事です。前回の式年遷宮（平成五年）の年の伊勢神宮の入り込み客数（内宮と外宮の合計）は八百三十九万人と、前年の一・三倍近くに増加しました（図2）。

次の式年遷宮は二十五年に執り行われることから、十七年から各種の遷宮関連行事が行

われています。例えば、十八年の第一次お木曳（注3）、十九年の第二次お木曳、二十一年の宇治橋渡（注4）始式等です。

三重県は、十六年に観光振興プランを策定し

図2 伊勢神宮(内宮と外宮の合計)への入り込み客数



資料：「観光レクリエーション入込客数推計書・観光客実態調査報告書」三重県

た際、三重県の核となる観光地として伊勢神宮を有する伊勢志摩地域と、十六年七月に世界遺産に指定された熊野古道・伊勢路関連地域を掲げ、「歴史・文化」と「自然・風景」を消費者に伝えるべき「基調イメージ」としました。さらに、三重県はこのプランに基づいて「誘客戦略」を策定しており、その中でも「祭り」がイメージ定着の切り口の一つになっています。

十九年度に策定された第二期誘客プランにおいても、三年間（二十〇二〇～二〇二二年度）の誘客基本テーマを「歴史・文化」として、伊勢神宮や式年遷宮を積極的に誘客施策に活用しています。

三重県ではこれらのプランに基づき、十七年度以降、首都圏での情報発信や旅行商品の販売強化、二次交通（バス等）の充実等に力を注いでいます。伊勢神宮関係の誘客事業としては、雑誌記事の掲載、テレビ番組の放映、モニターツアー、JRの車内広告、食材タイアップイベント、伊勢志摩キャンペーン、六本木ヒルズでのお木曳、一日神領民による初穂曳体験ツアーの募集等です。十七・十八年度に執り行われた「伊勢神宮式年遷宮お木曳行事一日神領民」は、旅行会社が全国から七万六千人を集客しました（注4）。

三重県だけでなく、市町や鉄道会社、旅行会社、

バス会社等、多様な主体が伊勢神宮ならびにその周辺地域への誘客に取り組んでいることから、遷宮行事開始以降の伊勢神宮への観光客数を見ると、前回の遷宮行事期間に比べ今回は大きく伸びています（図3）。

### 宗教行事に

### 行政がかかわる意味

少子高齢化と人口減少は日本全体の問題であり、特に地方では深刻です。祭りやイベントを支える住民の減少は、祭り・イベントの存続にも影響します。特に伝統ある宗教行事や祭りは、地元が力を合わせないと維持しきれません。したがって、行政も宗教行事にかかわらざるを得ません。

とはいえ、「政教分離」という憲法の規定もあり、宗教行事への行政のかかわり方については、行政の意見も分かれます。宗教行事施設を観光客誘致や地域の活性化に不可欠な資源（財産）ととらえ、積極的にかわる（予算付け、人的支援等）場合と、行政はあくまで裏方・支援にとどまるという場合があります。

諏訪大社周辺の市町村や三重県は、前者の立

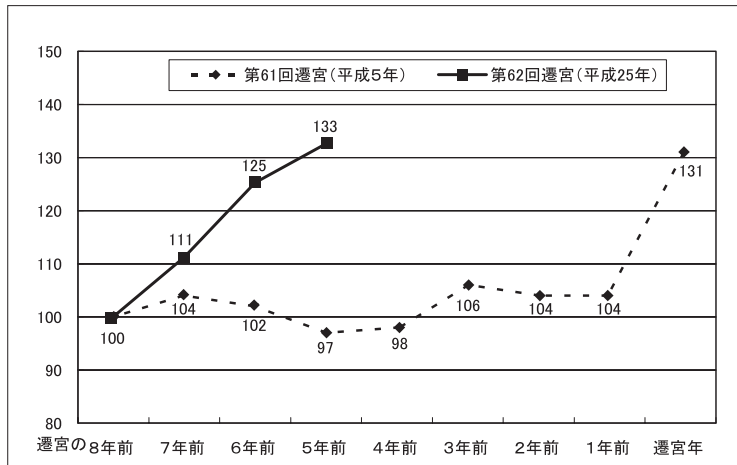


旅行会社の集客による平成17年一日神領民のお木曳  
（写真提供：三重県観光販売システムズ）

場があり、宗教行事で多くの観光客を誘致することによる地元経済の活性化に期待しています。つまり、観光客による地元での飲食、土産物の購買、宿泊等で、地元での消費額拡大も見込んでいます。

また、経済効果のみならず、祭りのにぎわいの創出や、観光客にも祭りの「担い手」として

図3 伊勢神宮観光客数  
 <式年遷宮行事開始年の観光客数(内宮+外宮)を100とした時の指数>



資料:「観光レクリエーション入込客数推計書・観光客実態調査報告書」三重県

伊勢神宮(内宮+外宮)の観光客数

単位:万人

遷宮の	8年前	7年前	6年前	5年前	4年前	3年前	2年前	1年前	遷宮年
第61回遷宮 (平成5年)	昭和60年 640	61年 667	62年 656	63年 623	平成元年 626	2年 676	3年 668	4年 663	5年 839
第62回遷宮 (平成25年)	平成17年 566	18年 630	19年 709	20年 751	21年 —	22年 —	23年 —	24年 —	25年 —

資料:「観光レクリエーション入込客数推計書・観光客実態調査報告書」三重県

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を

より深く知ってもらおう(例:お木曳への参加)ことで、祭りの継続の確実性が増すということも効果として期待しているのです。

宗教行事を観光的な集客イベントとして見ると、宗教行事の期間だけ観光客が集中的に増えるのですが、その経済的効果は一過性の場合が多いのが現状です。しかし、宗教行事を、地域を



連載 I  
あの町この町  
第 37 回

# オリベの心——岐阜県多治見市

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀  
(イラストレーター)

「たいていの人が同じ手つきをする。親指と人差し指で半円をつくり、ヒョイと持ち上げる。」

「どう、寄ってかない？」

これだけで十分にわかる。ちょっととイッパイやっていかないか。半円は盃を持つ手つき。一国の国民すべてが即座に了解し合うサインを所持しているといったことは、世界でも珍しいのではあるまいか。

しかも単なる飲食の勧誘ではないだろう。さまざま条件を含みこんでの誘いであって、まずは「軽くイッパイ」の意味をこめている。一日の労働のあとのちょっとした息抜き。つぎに予定のスケジュールではなく突然の思いつきをあらわしている。さらに誰にでも示すしぐさではなく、気の合った同士に成り立つジェスチャーであって、二本指による半円は親しみをこめた連帯のあか

しなのだ。国民共通のサインが、これほど微妙な条件を含んでいる点でも、世界的にみて稀なケースではなからうか。

——などと、あらぬことを考えながらバスに揺られていた。岐阜県多治見市郊外、市之倉に「さかづき美術館」がある。古今東西、より抜きの盃が集めてある。日本人に独特のジェスチャーが生まれたのも、二本指に収まるほどの小さな容器があつてのこと。そして市之倉はかつて、日本全国の酒盃のおおかたをまかなつていた。

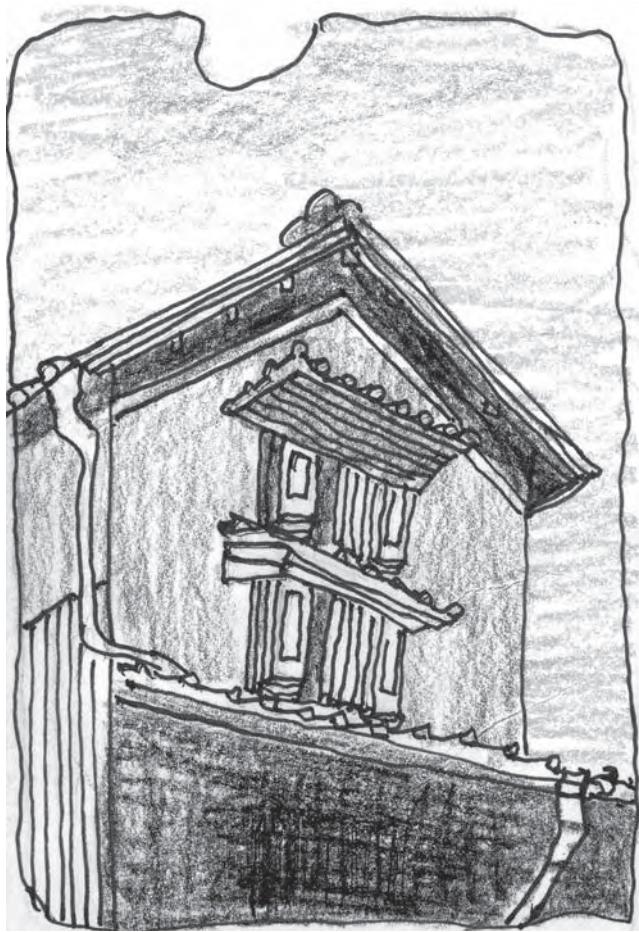
岐阜県の南端、一つ山をこえれば愛知県で、セトモノの町瀬戸が近い。旧の言い方だと尾張と美濃の国境であつて、ここから北へ一列に多治見、土岐、瑞浪と、美濃焼で知られる窯業都市が三兄弟のようにつらなっている。いずれも土岐川に沿っており、地質学でいうと第三紀層から成つていて、

専門用語で「蛙目」「木筋」とよばれる良質の陶土を産する。

南の瀬戸へ通じる国道248号が山あいに入つていった。小川沿いの三叉路が入口で、そこから「市之倉オリベストリート」がのびている。オリベは千利休の高弟古田織部にあやかつてのこと。数ある弟子たちのなかでも斬新で自由な発想を打ち出した人物として知られており、多治見市がちゃっかりと町づくりに拝借した。タジミの「ミ」とミュージアムの「ミ」を合体させて街全体が「たじみゆうじあむ」。柱の一つが市之倉のオリベストリートというわけだ。

幸兵衛窯、竹窯、幸輔窯、平正窯、民宝窯、仙太郎窯、玉山窯……。細長い谷の斜面に窯元が点在しており、ここが盃の里になつたについては、この地形が大いに関係していた。





問屋の蔵 (本町オリベストリート)

たのは、当時のトピックスをあしらった贈答品、さらに種々雑多なお遊び皿。

「打出の小槌皿 飲み干しても飲み干してもお酒が出てきます」

「十分皿 九分まではいが十分目まで注ぐとサイフォンの原理で流れ出てしまう」

「賭事皿」は底がサイコロ仕掛けになっていて、出た数だけ飲み干すべし。風流皿では酒を注いで中をのぞくと……。おおよそ予想できるのだが、美女の顔、裸女の体が

ほんのりと浮かび出る。皿をながめているだけで、いい気分になってきた。

「企画展示 石川九楊 盃千字文」

一室が現代陶工の壮大な試みにあててある。千字文とは梁の武帝が王羲之の書から千字を集めて作らせた書の手本である。選択を命じられた周興嗣は、四字一句・二五〇句でまとめ上げた。一つとして文字のダブリがなく、全体が「いろは歌」にひとしい音韻文になっている。伝わるところに

よると、周興嗣は一晚でこの整然とした美文を完成したが、一夜にして髪が白髪に変わったという。

二〇〇三年五月、市之倉の幸兵衛窯に学者書家石川九楊がやってきた。千の盃は人間国宝加藤卓男の担当。制作は二週間にわたり、筆と指との共作また競作がつつけられた。書家がありとあらゆる書体を駆使したのに対して、陶工は赤絵、鉄絵、掻き落としと秘術をつくしてわたり合った。

「天地玄黄 宇宙洪流……」

盃をかえるごとに玄妙な絵文字があらわれる。「晝眠夕寐」などとのしくうたったのは、盃のフチ上下左右四点到豆つぶほどの文字が入っていて、あいだは何重もの細い線をつないである。ウトウトした、ここちいい眠りを絵解きしたぐあいである。

市中にもどると、こちらは「本町オリベストリート」。土岐川の橋詰から本町筋にかけて、かつては陶磁器問屋街として賑わった。南の市之倉、また北の高田・小名田地区から仕上がり品が送られてくる。通りの左右に残っている倉の大きさ、重厚さからも問屋衆の力がうかがえる。厚ぼったい黒壁三層づくり。二階と三階に小屋根と両開きの窓があって、さながら洞窟の入口のよ

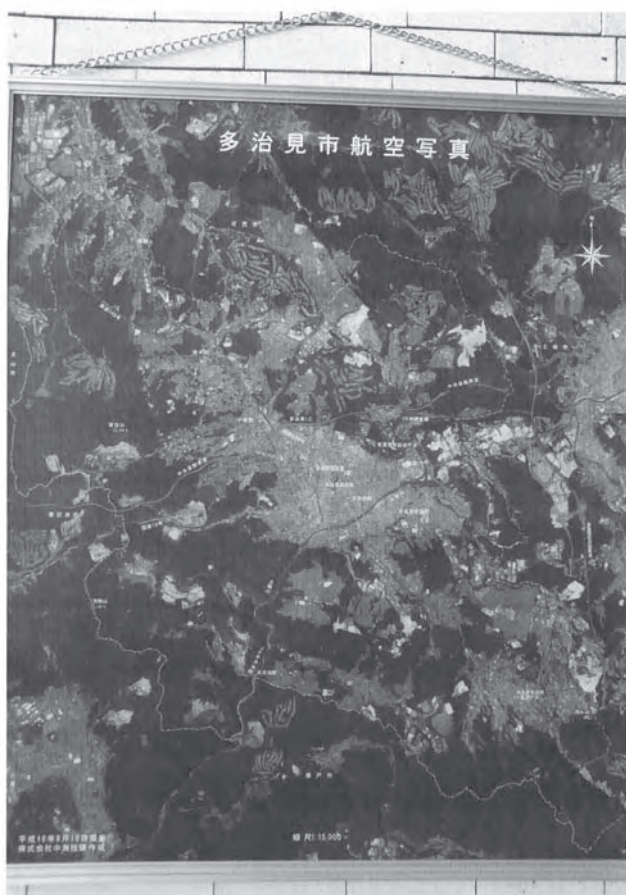
うな奥をのぞかせている。

橋詰の「たじみ創造館」は陶磁器ショップのほか観光情報発信基地、多治見市PRセンター、ギャラリーを併設している。ガラスと鉄と木材をあざやかに使いわけた。

オリベストリートのもう一つの目じるしは「智結蔵」といって、いままさに美濃焼に日も夜もあけない現役作家の作品の展示と販売を受けもち、こちらにもギャラリーがあつて喫茶店が控えている。

二つのスポットは歩いて約十分。多治見市がオリベの心をいただいた町おこしが、いま着々とすすんでいる。和菓子のお店、レストラン、骨董、郷土料理。うつわの店をひやかしながら散索ができる。本町オリベストリートは別名が「はなやぎのまち」。小路に折れこむと、昨日の賑わいのよすがをとどめた雄壮な町家と対面できる。

昔の茶人を借りてでも再生を図ったのは、旧来の商店街がシャッター街と化したから



市役所で見かけた地形図

だ。本町通りと対角でのびる多治見銀座には、いかにも老舗のたたずまいをもった店がまえばつづくが、「たのしいショッピングはぎんざ」の看板は色あせ、アーケードは波を打ち、足元の色タイルはヒビ割れ、数十の店舗のうち商いのあるのは片手で数えるほど。商店街の中ほどに据えられた「多治見國長公遺址」の立派な石柱が孤影をとどめている。

商店街のつきる一帯には旧多治見村の産土神・新羅神社が祀られ、名代の和菓子屋や明治期の豪商の邸宅跡、二階建ての多治見温泉などがある。以前は問屋街と商店街と市役所が、ゆるやかな三角をつくっていたことが見てとれる。

その市役所のフロアに「多治見市の人口と世帯」が掲げられていた。(二〇〇九年十月一日現在)

男 五七〇五一(マイナス一五人)

女 五九九七一(マイナス四八人)

総数 一一七〇三二(マイナス六三人)

世帯数 四三三〇八世帯(プラス五世帯)

(カッコ内は前月との比較増減数)

なぜか前月は女性の減数がきわめて多かった。人口がへっている一方で、わずかながらにせよ世帯数がふえているのは、高年齢と若年層との「新陳代謝」が進行しているか



謎の三角屋（本町オリベストリート）

らだろう。もとより当地にかぎらない。いまや全国いたるところで見られる現象である。

多治見市は知恵をしばり、そして一つの決断をした。三角形の一边は捨てて、残った二つで復活を考える。商店街は一本の線だったが、もう一方の本町筋は「筋」をふとらせ、面にひろげていける。元問屋の商家を生かした「織部うつわ邸」、旧家の白壁と瓦屋根を生かした料理店、明治初期の土蔵を活用した磁器、漆器、ガラス器の店……。

そこに「三角屋」というたのしい店がまじっていた。以前はさて何の店であって、現在はまた何の店やら。古風な色タイロと白いしつくいづくりで、窓からのぞくと、ひと昔もふた昔も前の日

常雑貨が雑然と並べてある。町の再生のなかで正体不明の居候風だが、実をいうと現在の町づくりには、この手の遊び人が必要だろう。きちんと整った計画だけでは、いかにもつくりものの風で窮屈だ。一見、役立たずのおどけ者がまじっていると、町並みに陰影ができて息抜きになる。自由なオリベイズムの根っこには必ずや遊び心がはたらいっていたはずである。

問屋街は郊外の「美濃焼スクエア」に集中した。卸センターであって、車社会のショーウィンドウはこちらにおまかせ。そして未来の陶工養成に「こども陶器博物館」を新設した。旧世代が幼いころに使った茶碗類、名の知れたイラストレーターの原画の常設展示、それに幼い者たちのための絵付工房。オリベの知恵がきちんと生かされている。

かつては厳しく閉ざされていた窯元が、いまではひろく開かれている。市之倉の幸兵衛窯は文化一年（一八〇四）、初代加藤幸兵衛によって開窯された由緒をもち、代々にわたって名工を生んできた。ベルシャ陶器を研究し、その技法を美濃焼に応用しようとする悪戦苦闘した人もいる。その際の資料、ベルシャ、中国、朝鮮渡来の古陶なども、こころよく見せてもらえる。サロンにはお



茶が用意されていて、財布が軽くても即席のお大気分になれる。

同じ市之倉の仙太郎窯では、志野、織部、黄瀬戸といった伝統技法がみごとに現代に生かされていた。アートサロン仙太郎にいると、新島の融合を実物によって味わえる。

近くの八幡神社をすすめられて寄つてみたが、格天井を陶板が埋めつくして全八〇点。振り仰ぐと人間国宝や重要無形文化財の苦心作が碁盤目の中からのぞいていた。

三つ目の柱である「たかた・おなだオリベストリート」は、陶磁器の修理屋という珍しい店を起点にしてゆるやかな坂道を行くこと約二〇分。徳利と酒瓶の成宝園、葉用土瓶や土鍋、湯たんぽの弥満丈櫛窯、故人間国宝荒川豊蔵を継いだ子息の水月窯、小名田地区に見つかった古窯跡によって、戦国時代から江戸初期にかけて、そこに大窯三基、連房式登り窯二基のあったことが確認されている。現存するのが少ないので有名な白天目茶碗が、大窯で焼かれていたらしいのだ。

陶磁器の湯たんぽを初めて見たが、形はステンレス物と同じでも、もつさり、ずんぐりしていて、波形が人体の胸部とそっくり。高田地区で使用している木節陶土は古代の植物が堆積してできた粘土というから、

同じ湯たんぽでも冷やかな金属にはないあたたかさややさしさを寄りそってくれるのではなからうか。

一巡して本町筋にもどつてきた。あらためて白磁の陳列をながめていると、二本指ではなく片手でつかむ大きさの深い湯呑みが目にとまった。底に藍色で円が二重に入っている。

係りの人にたずねたところ、酒を利くときに使う唎猪口きりちゆうこ。たいてい「ちよこ」といい、これをおをつけて「おちよこ」がふつうだが、正確には「ちよく」であつて、ちよこはちよくの変じたかたち。漢字では猪口。

深い白磁の底に染めつけてある青い太い円は「蛇の目」といって、唎酒のとき、そこに照り映える光沢を観察するのに必要だそう。半世紀に及んで親しんできた飲み物だというのに、およそもの知らずで過ごしてきた。

ことのついでに唎酒の作法もおそわつた。まず唎猪口で香りをかく。軽く動かすと香りが立つので、満盃ではなく六、七分目にするのが目安だそう。ただし、色を見るには満盃のほうがいい。

「つぎは酒をこう口に含みましてね——」係りの人は色黒中背、肥りぎみ。かなりの酒好きのようで、いかにもうまそうに口

に含むしぐさ。目を閉じて鼻の孔からそつと息を吐き出す。猪口の上からかいだ香りは「はな」といい、鼻から出てくるときの香りは「ふくみばな」という。鼻から出すと酒がガス状になって、香りのぐあいがよくわかる。

口に含む量は、盃三分の一ぐらい。唎酒はたくさん酒を相手にするので、舌で味わう程度にとどめるわけだ。

「それから吐き出します」  
「のどごし」といって、酒を呑みこんだときのすべりぐあいが大切だと思ふのだが、唎酒では口中の酒を吐き出すのが作法のようだ。気がつくと、いつしか自分も指を口元にあてがっている。ひとたび口に含むと、吐き出すのはけっこう難しいのではなからうか。

目の下のまっ白な磁器に、よく見るとこころもち朱がつけてあつて、まるで湯上がりの女性の薄化粧のようにナマめかしい。かたわらの筆文字をたどると、「あすよりの後のよすがはいざ知らず 今日のひとつは酔ひにけらしも」

たしか良寛さまのお歌である。越後の名僧もまたおりにつけ、二本指で半円をつくり、「今日のひとつ日」を念じていたのではあるまいか。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ  
風土燦々⑩

前代未聞の三河版サミット (前編)

愛知県新城市

ルポライター  
飯田 辰彦

きっかけは、地名だ。以前、仕事で東海地方から飛騨方面に向かう際、浜松と下呂を結ぶ国道257号線をしばしば利用していた。単にルートがショートカットになるだけではなく、257号の沿線には魅力的な見どころが多く、勝手にハンドルがその方角になびいてしまうのだった。

いつのころか、旧鳳来町を通過するたびに、地図上に見える「連合」という地名が気になりだした。てっきり「つれあい」と読むものかと思いついてみた。三河の山の中に労働組合の本部があるわけではないから、まさか「れんごう」と読ませるはずはない。と。長年の懸案事項に終止符を打つべく、この夏、思い切って現地を訪ねてみた。

連合の手前、県道32号線沿いの集落は海老。かつて伊那街道がにぎわっていたころ、「中馬」の要衝として栄えた宿場町だ。殷賑の名残はほとんど消え失せてないが、

通りに面した家並みにそこはかとない時代の記憶のようなものが感じられるのは、歴史のなせる業か。町外れの先、稲目トンネル入り口で右折すると、いかにも里山然とした連合地区が現れた。そのまま二キロばかり走ると、右手に小学校と思しき建物を発見。壁に連谷小学校の文字が読み取れる。

「連谷と読みます。連合と四谷が合同で立ち上げた古い小学校です。連合の字名は明治の初め、真菰、方瀬、与良木、須山の四村が合併するとき、一つに合わさるという意味で連合村と名付けられました。連合村は明治二十二年に川下の海老村と合併し、以後大字として現在に至っています」

こんな解説をしてくれたのは、小学校の裏手に住む大橋弘太郎さん。ちょうど田んぼの仕事から帰宅したところだといい、親切に私をお茶に招いてくれた。弘太郎さんの話から、連合が結局「れんごう」と読む

ことが判明し、連合の上手に続く集落が四谷(大橋家も四谷に属す)であること、さらには両集落が純農村という共通の成り立ちから、歴史的に結び付きがとりわけ深いことなどが知れた。

お茶が出されたとき、一瞬、私の目は点になりそうになった。お茶請けがただものではなかったからだ。それがハチであることはすぐに分かったのだが、私にとって初見のハチであるため、ちよつと慌ててしまったのである。私の動揺を察したはずの弘太郎さんが、何食わぬ顔で説明してくれる。

「へボの佃煮です。ここらではハイスガリともいい、地バチのことを指します。お茶よりもビールのほうがいいですか?」

これまで何度も噂に聞きながら、なぜか対面するチャンスに恵まれなかったクロスズメバチとの遭遇は、かくして実現したのである。九州宮崎を主たる仕事のフィール



へボの餌が入った容器を指さす弘太郎さん

ドとしてきた私は、ニホンミツバチやオオスズメバチ、さらにはアカバチ（キイロスズメバチ）などとは日常的に接してきた。もちろん、オオスズメバチやアカバチの料理は大好物だ。だから、へボの佃煮も全く抵抗はなかった。

佃煮には、幼虫はもとより、蛹さなぎも成虫も一緒に煮込んである。クロスズメバチの名前通り、成虫は黒い色を帯びており、佃煮になつてもこの黒色は残る。初めてこれを食べる人は、幼虫の形姿とともにその黒い色味にびびるかもしれない。一方、甘辛

の加減も程良いこの珍味を、私はいやしくも二度お代わりしてしまった。

お茶のあと、弘太郎さんに誘われて裏庭に出ると、リングボックスほどの大きさの木箱が五、六個、納屋に立て掛ける格好で軒下に並んでいる。へボ用の巣箱だった。さらに、巣箱の上の空間にはパイプが渡されていて、そこにへボの餌となる鳥肉と砂糖水の入った容器がつるされている。

「巣箱はすべて自作です。ちょうど今ごろ（六月下旬〜七月）、成長過程のへボの巣（野球のボール大）を山から取ってきて、各自家で飼育するんです。秋の『へボサミット』に向けて、みんな一生懸命へボの世話に取り組みます」

サミットとは恐れ入ったが、

要はへボの巣が最大に成長する盛秋のころに、巣の大きさを競うコンテストが開かれるのだという。三河の山間部や北遠、また南信にかけての一带は昔からへボを食する習慣があり、いつのころからか、こうした大会がこの地域の各所で開催されることになったものらしい。

さて、へボの写真を撮ろうと巣箱に近づいた瞬間、危うく斥候せきこうバチに刺されそうになった。体は小さく（体長約十五ミリ）でも、獐猛じやうちゆうな性質のスズメバチに変わりはないのだ。「人によっては、へボであっても刺されたら死にますよ」と、弘太郎さんが笑いを抑えつつ諭してくれる。私はふと、宮崎でのオオスズメバチ取材の折の緊張感を懐かしく思い出していた。

秋のサミットでの再会を約し、大橋家を辞して、四谷の山狭をさらに分け入った。すると鞍掛山の麗姿を背景に、眼前に見事な棚田が広がった。「日本の棚田百選」にも選ばれている「四谷の千枚田」である。まったく予期せぬ出会いであり、思いつきの旅のフィナーレにしては、ちょっとできすぎの展開だった。二十二戸の農家の手によって守られている棚田は、連谷地区の団結の家徴であると、あとから聞いた。

（いいだ たつひ）



連載Ⅲ  
ホスピタリティーの  
手触り58

# 日本人と温泉

旅行作家

山口 由美

## \*\*\*\*\* 鳥来にみる 日本式の温泉文化

台北の郊外に鳥来（ウーライ）という温泉地がある。東京から箱根に行くより、少し近いくらいだろうか。緑深い山に、つづら折りの坂道が続く感じが、箱根に似ている。

道端に立つ地元の原住民（台湾では、先住民のことを原住民と呼ぶが、ネガティブなニュアンスはない）であるタイヤル族の人形の、アイヌのようでも、ネイティブアメリカンのようでもあるエキゾチックな民族衣装が目に入らなければ、本当に箱根と錯覚しそうになる。南国ゆえ、一〜二カ月は季節がずれて暖かいが、ほのかに温泉の香りを含んだ湿った空気の感じもよく似ている。

そう思っていたら、なんと「四季の庭箱

根苑」という宿の看板があるではないか。さらには、箱根の某有名旅館と全く同じ名前の宿もある。どういふことなのだろう。

泊まった宿は、日本人経営の温泉リゾートで、鳥来に赴任する前は箱根にいたという日本人支配人が出迎えてくれた。

早速、道中で出会った「箱根」の数々を報告すると、支配人は、少しばつの悪そうな表情をして、「悪気はないんです。ここが本物の箱根じゃないことは、みんな分かっています。彼らにとって箱根は憧れなんですよ」と答えた。

熱海をマイアミビーチになぞらえてみると、菅平を日本のダボスと呼んでみたりすると同じことなのだろう。箱根出身の私としては、不思議な感覚を覚えたのだった。

台湾では、近年、温泉ブームである。「箱根」の一件は、ブームの先に、はつき

りと温泉の本場としての日本があつて、その憧れが牽引しているのだということに改めて実感させられた。

もともと台湾では、ヨーロッパなどと同じく、温泉は水着を着て入るスタイルが主流だ。もしくは、個室の貸し切り風呂に入るため、裸になつて大浴場に入る習慣はない。ところが、最近、高級温泉リゾートを中心に、日本式の大浴場が普及しつつある。しかも、台湾では、個室風呂や水着で入る大浴場よりずっと高級イメージで、事実、料金も高いのである。

この数年、裸で入る日本の温泉は、当たり前のように外国人に受け入れられている。ニセコ辺りに行けば、オーストラリア人も、ロシア人も、大喜びで雪を見ながら露天風呂に入っている。台湾や香港からの観光客は、ことさらに温泉が好きとは聞いていた



鳥来温泉、スプリング・リゾート・ウーライの日本式温泉大浴場

が、それにしても日本式の温泉入浴が輸出されているとは思わなかった。

台湾の場合は、日本の旧植民地であったことも影響しているのだろう。

日本と同じく環太平洋火山帯の上にある台湾には、日本と同じく温泉が多い。だが、それらに入ることが一般化したのは、日本

の支配以降。そのため台湾の温泉は、日本人によつて発見、もしくは開発された所が多い。日本式の浴場は、当時から統治者である日本人用に作られていたから、とりわけ違和感がなかったのかもしれない。

それにしても世界を旅して思うのは、温泉がわいているからといって、日本人以外の民族は、必ずしもそれに入ろうと発想しないということだ。裏を返せば、世界で日本人ほど温泉好きな民族もいない。

かつて植民地においては、支配した民族が、フランス植民地におけるフランスパンのように、これだけはないと困る文化やライフスタイルを持ち込んだ。日本の場合、それが温泉だったのかもしれない。

やはり長い日本支配の歴史を持つ中国東北地方にも、日本人が開発した温泉は数多くある。さらに南方に進軍してからも、日本人は、温泉を探し求めた。

どんな時でも温泉を求めた日本人の心意気に感服するエピソードが、パプアニューギニアに残っている。

『ラバウル温泉遊撃隊』という本によれば、太平洋戦争のさなか、日本の司令部があったラバウルの山奥に、その名も「宇奈月温泉」という名の温泉があったという。そして、本のタイトルにもなった温泉の名前を冠した部隊があった。戦争があるうが、爆撃があろうが、たとえ死んでも温泉に入りたい、それが日本人にとつての温泉なのだろうか。

それほどに、日本人の魂である温泉に入るといふ行為、とりわけ裸で温泉に入るのは日本特有の文化で、かつては外国人には受け入れられないもの、と考えられてきた。しかし、生まれたままの姿で手足を伸ばす、あの開放感、どんな民族でも思い切つてやってしまえば気持ちよく、病みつきになるらしい。

台湾で市民権を得つつあるという日本式の温泉文化。もしかしたら、日本の温泉に世界から観光客を呼ぶだけでなく、ひとつのライフスタイルとして、世界に輸出できる可能性を持っているのかもしれない。ライフスタイルが輸出されれば、付随するさまざまな文化も輸出される。

ちなみに鳥来温泉では、日本の桶職人が技術を輸出し、メイド・イン・ウーライの日本式桶が作られている。

(やまぐち ゆみ)

# 旅の図書館 新着図書紹介

昨年秋、「山手線で逢いましょう」というキャッチコピーが躍るJR東日本の車内広告や駅張りポスターを都内でよく見かけた。有楽町界隈のモノクロとカラーの写真が上下に並び、「東京の昔と今は、山手線ですながっています」という文章も添えられたポスターを見て、山手線の命名百周年を知った人も少なくなかったはずだ。

その百周年を迎えた山手線の歴史やうんちく話だけで一冊の本ができてしまった。『命名100周年！山手線のヒミツ70』（イカロス出版）には、誕生から運行形態の変遷、駅数と総延長、一日に運転される列車の本数、一日の利用客数、初電の発駅と終電の着駅などに至るまで、興味をそえられるテーマが次から次へと登場する。

東京や品川、渋谷、新宿、池袋、上野といった都心のターミナルを結ぶ山手線は、一般的にはぐるりと回る環状線の路線名として認識されていることに異論を唱える人はいないだろうが、山手線という路線の正式な区間は、実は、品川から渋谷、新宿、池袋を経由して田端に至るまでの二〇・六キロなのだそう。それでは、山手線を電車が周回する環状線たらしめている他の区間はどのようなのかというと、田端／東京間の七・一キロが東北本線、東京／品川間の六・八キロが東海

道本線なのである。

つまり、環状線としての山手線の電車は、東北本線と東海道本線に直通乗り入れすることで、周回運転を行っているということになるわけだ。鉄道ファンや電車マニアにとっては、恐らく一般常識のような当たり前の話なのかもしれないが、通勤や通学で毎日のように山手線を利用していても、そんなことを意識して乗っている人は少ないに違いない。

そういう新しい視点を気づかせてくれるという意味でも、そんな、目からウロコ的な話が繰り広げられる事実は、非常に興味深い。

山手線の原型となった品川／赤羽間の路線が開業したのは一八八五年（明治十八年）。当時、上野までだった東北本線（当時は日本鉄道本線）と新橋までだった東海道本線（当時は官設鉄道）を連絡するのが目的だった。ただ、品川／赤羽間といつても、途中駅が渋谷、新宿、板橋の三駅だけだったというから、現在の「京浜東北線」のルートではなく、山手線と赤羽線を結ぶルートになっている。もちろん、上野と新橋をまっすぐに結べば路線も短くて済むわけだが、当時はすでに住宅地が広がっていて新たに鉄道を建設することが困難だったため、武蔵野台地東端の山の手側に線路を敷設することになったのだという。山手線の「や

まのて」というのは、武蔵野台地の東端を意味しているのだ。

したがって、山手線の読み方は、こうした歴史的背景も含めて、「やまてせん」ではなく「やまのてせん」が正しい。では、なぜ「やまてせん」という呼び方が生まれたかという点、戦後、日本に進駐してきた連合国軍が国鉄に対して路線名を英文で併記するよう指令した際、当時の国鉄内部での通称だった「やまて」をそのままアルファベットにして「Yamate Loop Line」と表記したため、一九七〇年代初めまで、「やまてせん」という呼び方が定着してしまったのだという。

その後スタートした個人旅行客増加キャンペーン「ディスプレイ・ジャパン」で国鉄の全路線に振り仮名をつけて読み方が統一されることになり、一九七一年（昭和四十六年）三月から改めて「やまのてせん」と呼ばれるようになって、今日に至るのである。（挑生）



B6判 170ページ  
定価 1,700円  
イカロス出版

■旅行年報2009 最新刊

直近一年間の旅行・観光市場にまつわるあらゆる出来事について、数多くのデータ・資料をもとに分析。日本人の国内・海外旅行、外国人の訪日旅行、観光産業、国内観光地、観光政策など、さまざまな角度から旅行・観光市場の現状を一望できる一冊。○九年九月発行。

■旅行者動向2009 最新刊

国内・海外旅行者の意識と行動について毎年実施している当財団独自調査の分析結果をビジュアルに解説。○九年八月発行。

■Market Insight 2009

(日本人海外旅行市場の動向) 最新刊  
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。日本語版、英語版あり。○九年七月発行。

■観光実践講座講義録 最新刊

地域主体の観光、新しい時代の価値観を地域から発信する、毎年十一月に実施している二日間の講座講義録。平成二十年度の講師は、浜名湖えんため代表・稲葉大輔氏、前安塚町長／観光カリスマ・矢野学氏、元紀南振興プロデューサー／有限会社伊勢福社長・橋川史宏氏、田野畑村役場・渡辺謙克氏、東北観光推進機構教育旅行アドバイザー／観光カリスマ・小椋唯一氏。○九年三月発行。

※当財団出版物のご注文はホームページからお願いします。  
担当：財団法人日本交通公社観光文化事業部

電話 03・5208・4704 <http://www.jtb.or.jp>



次号予告

●来たる三月に「観光文化」は節目の二百号を迎えます。「旅の恵み」をお伝えすべく特集を「旅讃歌」とし、特別企画として池内紀、山口由美両氏をお迎えしての「旅は世につれ」と題した旅談義を紹介いたします。

調査研究だより

●人口減少社会を迎えている二世紀初頭のわが国では、交流人口の意義がこれまで以上に大きなものとなっております。なかでも訪日外国人旅行は「国際的善隣友好の外交的効果」と「外国人旅行者の観光消費による経済的地域の振興効果」が期待され、今後継続的に成長するマーケットとして大切に扱うことが重要です。

●このような背景のもと、現在、日本政府は、訪日外国人旅行者数を二〇一六年に二千万人、二〇一九年に二千五百万人誘致する目標を定めています。目標達成には「誘客」(市場の側に需要を創り出し誘致してくると「受入接遇」(地域への受け入れ態勢をハード・ソフトに整え、来訪者を満足させて帰す)を政策の両輪に据えた戦略的取り組みが不可欠です。

●当財団は外国人旅行者の誘致斡旋を目的とした機関「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」として発足(一九二二年)しました。現在も、観光庁を中心に実施される訪日外国人旅行促進を目的としたさまざまな施策に対する事業支援や各種調査研究を行っています。当財団が有する知見や研究成果を生かし、今後の訪日外国人旅行の促進に寄与することは、当財団に課せられた使命の一つと考えています。

(渡邊)

編集後記

◆歩く意義が問い直されています。歩くことによつて五感(視・聴・触・味・嗅)は鋭敏になり、心身ともに活発になります。身近に自然と触れ合い、地域の文化を学び地元の方と交流するには、歩くことから始めなければなりません。長崎市に代表されるように都市観光においても「まち歩き」が今や主流となり、全国各地で健康増進と地域振興を目的に「ウォーキング大会」が数多く開催され盛況を博しています。歩くことへのとまらぬことを知らない欲求は社会現象となっております。このエネルギーを都市近郊の里山や自然豊かな地域へ呼び込もうとする機運がわかに高まってきました。その仕掛けが英国を本家とする「フットパス」。日本では、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる「小径」と定義されています。地域住民が主体となつてその土地ならではの魅力を伝えられる小径を整備して旅人を迎え入れる。お金をかけずに出会いを演出することに知恵を絞る。「フットパス」は観光の諸課題を解決し今後の着地型観光の王道となるべき可能性を秘めています。地方の疲弊が厳しさを増す今日、「フットパス」が全国に広がってほしいと願つてやみません。

◆九月上旬、多摩丘陵のフットパス・小野路宿コースを早足で散策。のどかな風景をしばし楽しみました。美しい田園景観はまだ日本各地に残されていると思つた次第です。

(宇八)



## 観光文化 第199号

第34巻1号通巻第199号

発行日 2010年1月20日



発行所：財団法人 日本交通公社  
東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第1鉄鋼ビル  
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701  
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2  
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内  
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051  
<http://www.jtb.or.jp/library/>

編集人：外川宇八  
発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554